

「黄色団」解題

落 合 教 幸

早稲田大学在学中の乱歩は、多くのアルバイトに従事しながら経済学を学んでいた。

その一方で、雑誌発行への情熱は少年

時代と同様に持ち続けていた。大正二年

は、乱歩は数え年で二十歳にあたり、この九月に予科から学部的一年になる。喜久井町・西江戸川町・戸塚町と、早稲田大学近辺で三度の転居することになるのだが、ここで乱歩は少年期に熱中した黒岩涙香の本を再読する。「帝國少年新聞」についての印刷物は、その直前の小石川区春日町に住んでいた時期に作成されたものである。「帝國少年新聞」に関連する書類が三枚、「貼雑年譜」に残されている。「次ニ貼リツケタ三枚ノ印刷物ハ、喜久井町ノ家ニ移ル直前ニ印刷シ、發送スルバカリニナツテキタガ、資金ガツカナクテ、殆ト發送シナイデ終ツタヤウニ記憶スル。ムロン新聞ソノモノハ出ズジマヒデアッタ。時二十才。」とあって、その後三枚の印刷物が貼付されている。

「帝國少年新聞主意書」「推薦状」「地方支部について」

これら三枚が大正二年三月末に印刷されたことも書き込まれている。

さて、「黄色団」はこの「帝國少年新聞」に掲載されるべく執筆された物である。この原稿は、「センター通信」第二号で紹介した「中央少年」と同様に、「OPERA CHILDREN」と書かれた封筒に保存されていた。「帝國少年新聞社原稿用紙」と上部に横書きされた、十八文字×十行の原稿用紙に、細筆で書かれているが、縦についてはマス目は無視されている。三十枚の原稿が、こよりで綴じられた

状態になっている。

おそらくこの作品が、「地方支部について」の左側に印刷されている「帝國少年新聞の内容」のうち、「冒險小説 黄色黒手團」ということになるのだろう。予告された内容は、以下の通り。

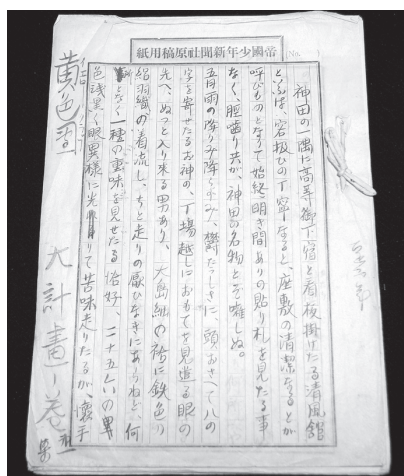
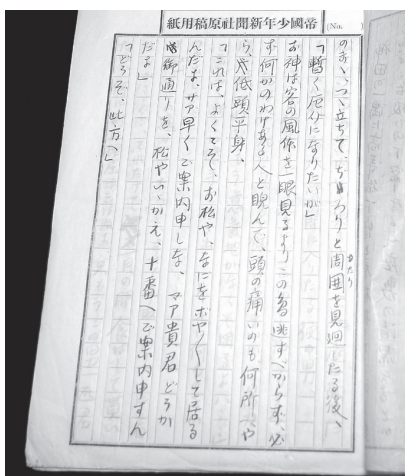
「無名の志士漱岩氏の空想で五名の熱血男兒が國家の爲に身を賭して敵國に入り不可思議の手段を弄してその滅亡を計るといふ筋最新科學を應用せる大規模の長篇小説である文章の壯大構想の奇絶思はず快哉を叫ばしむ」

このような構想のもとで、この小説は書きはじめられたのだが、「大正二年八月十九日 こ、まで書いていやになる」というかたちで放棄されている。

ちなみに「帝國少年新聞」に掲載を予告されたのはこれ以外に、「少年小説 希望」「滑稽小説 仙骨」「お伽噺 不死王國」といったものであった。これらの原稿は残されていない。

結局、「帝國少年新聞」自体も、発行されるまでにはいたらなかった。翌年乱歩は、手書きの回覧雑誌「白虹」を作成し、いくつかの文章を掲載する。

この大正三年秋に、乱歩はボーヤダイルの探偵小説と出会うことになる。それが手製本「奇譚」へと結実し、さらにはのちの探偵小説へとつながっていく。「黄色団」が書かれたのは、このような、乱歩少年時代の最後というべき時期なのである。



イエロー・クラフ 黄色団 大計畫ノ巻

神田の一隅に 等御下宿と看板掛けたる清風館といふは、客扱ひの丁寧なると、座敷の清潔なるとが呼びものとなりて始終明き間ありの貼り札を見たる事なく、脛嘸り共が、神田の名物とぞ囁しぬ。

五月雨の降りみ降らずみ、鬱たうしさに、頭おさへて八の字を寄せたるお神の、丁場越しにおもてを見遣る眼の先へ、ぬつと入り来る男あり、大島組の袷に鉄色の紹羽織の着流し、ちと走りの厭ひなきにあらねど、何(褻)所となく一種の重味を見せたる恰好、二十五六の(墨)(里)黒の書きかけか(色)浅黒く眼異様に光(朧)りて苦味走りたるが、懐手のまゝ、つゝ、立ちて、ち(ろ)りりと周閑(あた)りを見廻したる後、

「暫く厄介になりたいが」

お神は客の風体を一眼見るよりこの鳥逃すべからず、必ず何かのわけある人と睨んで、頭の痛いのも何所へやら、(朧)低頭平身、

「これは、よくこそ、お松や、

なにをボヤクして居るんだよ、サア早くご案内申しな、マア貴君どうか(朧)御通りを、松やい、かえ、十番へご案内申すんだよ」

「どうぞ、此方へ」

松といふ女中の案内にて奥まりたる一室、庭に面したるいと心持よき八疊の間に入りたる彼の男、

「ヤア、お松さんとやら大きにご苦労でした、もうなにも世話は入らんから、すぐ飯を呉れまいか、この男 腹が減つては、からもう意氣地がなくて困るよハ……」

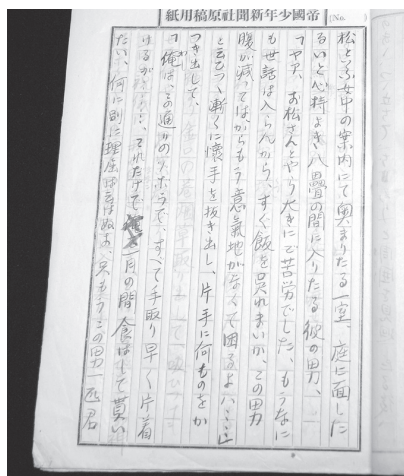
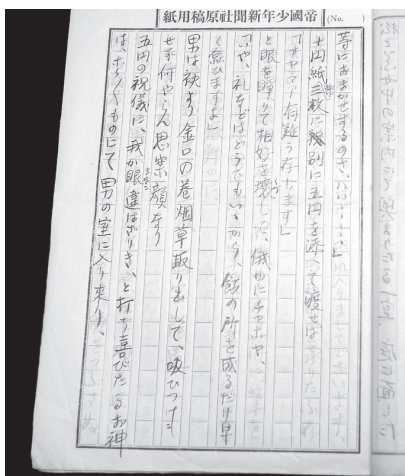
と云ひつゝ、漸くに懐手を抜き出し、片手に何ものをかつき出して、

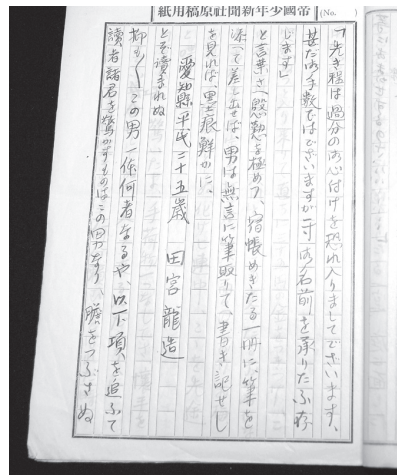
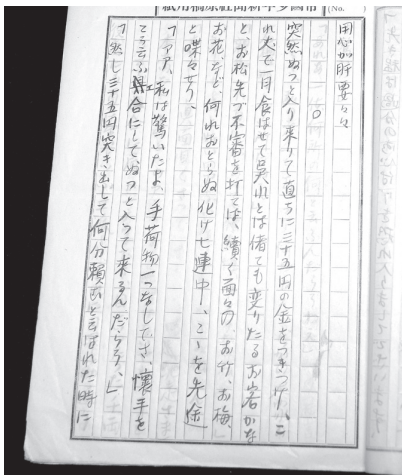
「俺は、この通りのツボラで、すべて手取り早く片着けるが、これだけで(朧)一月の間食はして貰いたい、何に別に理屈は云はぬよ、只もつこの男一匹君等におまかせするのさ、ハハ……」

十円紙幣三枚に(朧)別に五円を添へて渡せば

「オヤマア有難う存じます」

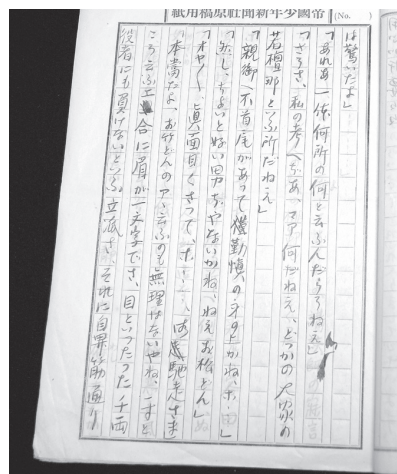
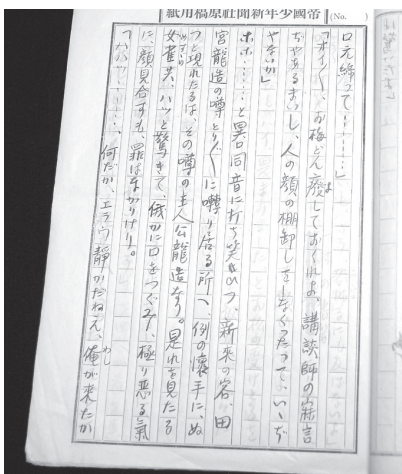
と眼を睜りて相好を壊して、

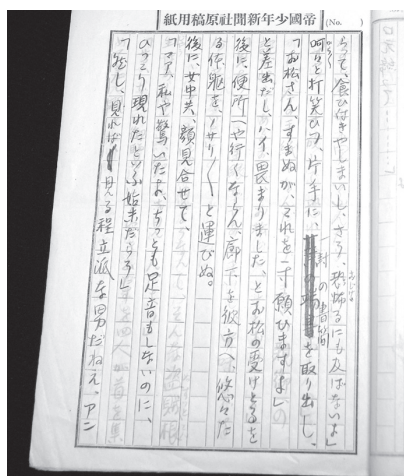
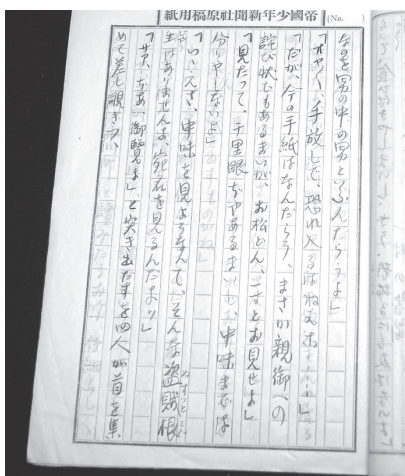




俄かにチャホヤ、
「いや、礼などはどうでもいい、
から、飯の所を成るだけ早く
厭ひますよ」
男は袂より金口の巻煙草取り
出して、吸ひつけもせず何や
らん思案顔なり
五円の祝儀に、我が眼違はざ
りき、と打ち喜びたるお神は、
ホク／＼ものにて男の室に入り
来り、
「先き程は過分の御心付けを恐
れ入りましてございます、甚だ
御手数ではございますが一寸
御名前を承りたふ存じます」
と言葉さへ慇懃を極めつ、宿帳
めきたる一冊に、筆を添へて
差し出せば、男は無言に筆取り
て、書き記せしを見れば、墨痕
鮮かに、
愛知縣平民二十五歳 田宮龍造
とぞ讀まれぬ
抑もく、この男一体何者なるや、
以下項を追ふて讀者諸君を驚か
すものはこの男なり、膽をつぶ
さぬ用心が肝要々々
○
突然ぬつと入り来りて直ちに
三十五円の金をつきつけ、これ
丈で一月食はせて呉れとは偕
でも変りたるお客かなと、お松

先づ不審を打てば、續く面々の、
お竹、お梅、お花、など、何れ
おとらぬ化け七連中、こ、を
先途と喋々せり、
「マア、私は驚いたよ、手荷物
一つなしでさ、懷手をこう云ふ
(具)工合にして、ぬつと入つて
来るんだらう、」
「然し三十五円突き出して何分
むと云はれた時には驚いたよ」
「あれあ一体何所の何と云ふ人
だらうねえ」
「さうさ、私の考へぢあ、マア
何だねえ、どつかの大家の若檀
那といふ所だねえ」
「親御へ不首尾があつて(僕)
謹慎の身の上かね、ホ……」
「然し、ちよいと好い男ぢやな
いかね、ねえお松どん」
「オヤ／＼、眞面目くさつて、
ホ……、御(差)馳走さま」
「本當だよ、お竹どんのア、云
ふのも無理はないやね、一寸と
こう云ふ工合に肩が一字で
さ、目といつたつた千両役者に
も負けないといふ立派さ、そ
れに鼻筋通り口元締つて……」
「オイ／＼、お梅どん癪してお
くれよ、講談師の寐言ぢやあ
るまいし、人の顔の棚卸しをし
なくつたつて、い、ぢやないか」





ホホ……と異口同音に打ち笑ひつ、新來の客、田宮龍造の噂とり、くりに轉り居る所へ、例の懷手に、ぬつと現れたるは、その噂の主人公龍造なり。是れを見たる女雀共、ハツと驚きて、俄かにかに口をつぐみ、極り悪る氣に、顔見合すも、罪はなかりけり。

「ハハツ……、何だか、エラウかだねえ、俺が來たからつて、食ひ付きやしまいし、さう、恐怖るにも及ばないよ」呵々と打笑ひつ、片手に、(二葉の端書一封の書簡を取り出し、

「お松さん、すまぬが、これを一寸願ひますよ」と差出だし、ハイ、畏まりました、とお松の受けとるを後に、便所へや行くならん、廊下を彼方へ、悠々たる体軀を、ノサリく運びぬ。

後に、女中共、顔見合せて、

「マア、私や驚いたよ、ちつとも足音もしないのに、ひつこり現れたといふ始末だらう」

「然し、見れば見る程立派な男だねえ、アンなのを男の中の男といふんだらうよ」

「オヤ、手放しで、恐れ入るはねえホ……」

「だが、今の手紙はなんだらう、まさか親御への詫び状でもあるまいが、お松どん、一寸とお見せよ」

「見たつて、千里眼ぢやあるまいし、中味までは分りやしないよ」

「い、えさ、中味を見ようなんて、そんな盜賊根生はありませんよ、宛名を見るんだよッ」

「サア、ぢあ、御覽よ」と突き出だすを四人が首を集めて差し覗きつ、「オヤ、大変、むつかしい名前だねえ」

「市内だよ、赤坂氷川町、アラ私の伯父さんの居る町だよ」

「エ、？、これがお前さんの伯父さんなのかえ」

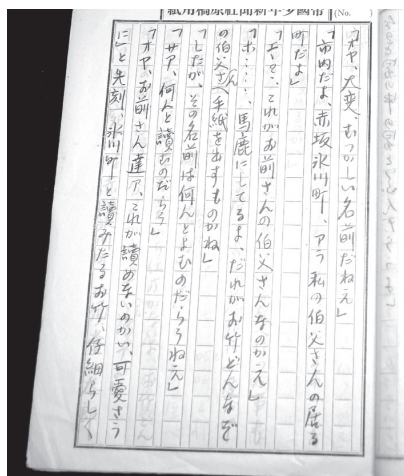
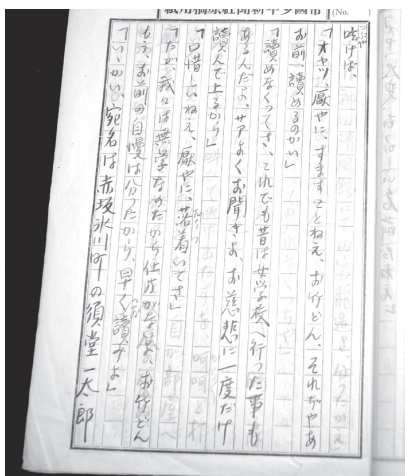
「ホ……、馬鹿にしてるよ、だれがお竹どんなぞの伯父さんへ手紙を出すものかね」

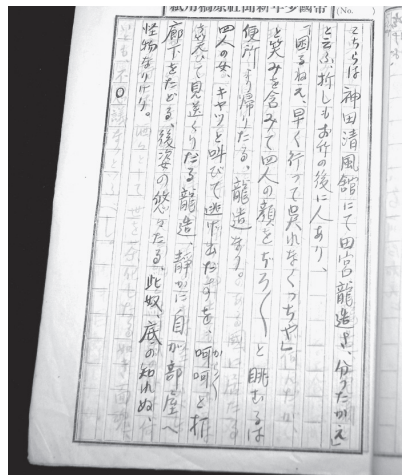
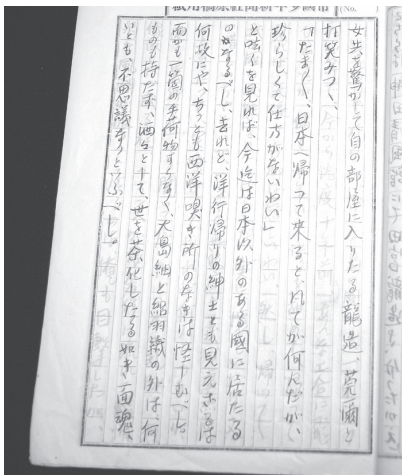
「したが、その名前はほんとよむのだらうねえ」

「サア、何んと讀むのだらう」

「オヤ、お前さん達ア、これが讀めないのかい、可愛さうに」と先刻、氷川町と讀みたるお竹、仔細らしく呟けば、

「オヤッ、厭やに、すますことねえ、お竹どん、それぢやあお前、讀めるのかい」

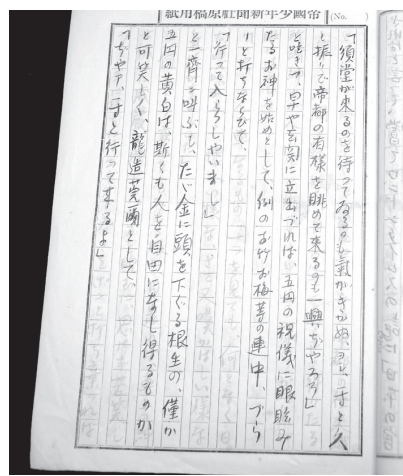
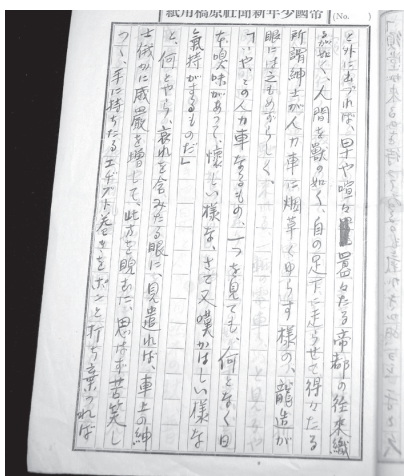




「讀めなくつてさ、これでも昔は女学校へ行つた事もあるんだよ、サアよくお聞きよ、お慈悲に一度だけ讀んで上るから」
 「口惜しいねえ、厭やに、落着いてさ」
 「だが、我々は無学なのだから仕方がないよ、お竹ともう、お前の自慢は分つたから、早く(お)讀みよ」
 「い、かい、宛名は赤坂氷川町の須堂一太郎こちらは神田清風館にて田宮龍造さ、分つたかえ」と云ふ、折しもお竹の後に人あり、
 「困るねえ、早く行つて呉れなくつちや」
 と笑みを含みて四人の顔をぢろくくと眺むるは便所より帰つたる、龍造なり。
 四人の女、キヤツと叫びて逃げ出だすを、呵呵と打ち笑ひて見送りたる龍造、かに自が部屋へ廊下をたどる、後姿の悠々たる、此奴、底の知れぬ怪物なりけり。
 ○
 女共を驚かして自の部屋に入つたる龍造、莞爾と打笑みつ、
 「たま〜、日本へ帰つて來ると、凡てが何んだが、珍らしく



て仕方がないわい」
 と咭くを見れば、今迄は日本以外のある國に居たるの■なるべし、去れど、洋行歸りの紳士とも見えざるは何故にや、ちつとも西洋嘆き所のなきは怪しむべし。
 而かも、一箇の手荷物すらなく、大島紬と組羽織の外は、何ものも持たず、洒々として、世を茶化したる如き面魂、いとも、不思議なりといふべし。
 「なんの日本の様な小ばけな島の國がと、一角悟つた心算で、今から恰度十年前、あんな工合に飛び出したが、偕て、十年の辛慘を甜めて、帰つて見れば、矢張り古郷は戀しいわい、然し、歸つて我が國の状態を見ればどうだ、実に、懐しいだけ又、口惜しいぢやないか、ロシヤの無政府主義の虚無黨のと云つたつて、實際行つて見れば何んでもないが、遠く異郷の空から聞いて居つた、日本の乱脈は、想像以上だ、成る程、フランスが(後)奢侈に流れて(横)情弱な風潮が漲つて居るのは、俺も目撃したが、さればと言つて、嘗てロンドンタイムスの記者に「日本の官吏は藝者買ひを



誇るさうだ」と言はれた事実
に比べれば何んでもない、」

龍造が独言、偕てこそ、十把
一束の凡々には非ざりけり、
ロシヤ、フランス、に目のあたり
その風俗を見、ロンドンに嘖々
のタイムス社員と相語りたる
事実、を以て見れば、彼必ず
異郷に、何事かを為しとげたる
余裕を、古國に提げて、今や畫
策の為にこの清風館を、一月の
休養場とはなせしなるべし。

「須堂が来るのを待つてゐるの
も氣がきかぬ、ヨシ、一寸と久
し振りで帝都の有様を眺めて
来るのも一興ぢやろう」

と呟きつ、早や玄関に立出づれ
ば、五円の祝儀に眼眩みたる
お神を始めとして、例のお竹
お梅等の連中、づらりと打ち
ならびて、

「行つて入らつしやいまし」

と一齊二叫ぶも、たゞ金に頭を
下ぐる根生の、僅か五円の黄白
は、斯くも人を自由になし得る
ものかと可笑しく、龍造莞爾
として、

「ぢやア、一寸と行つて来るよ」
と外に出づれば、早や喧々
囂々たる帝都の往來織るが如く、
人間を獸の如く、自の足下に走

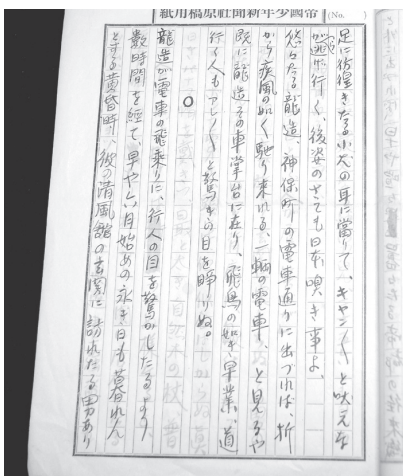
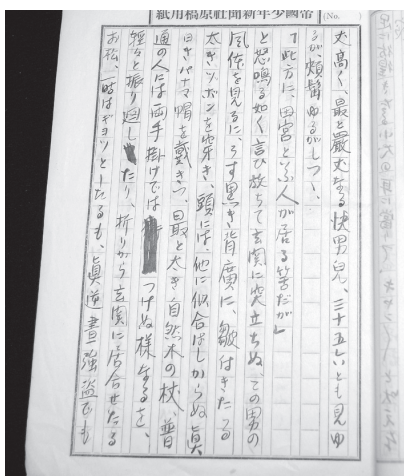
らせて得々たる所謂紳士が人力
車に煙草くゆらす様の、龍造が
眼には之もめずらしく、

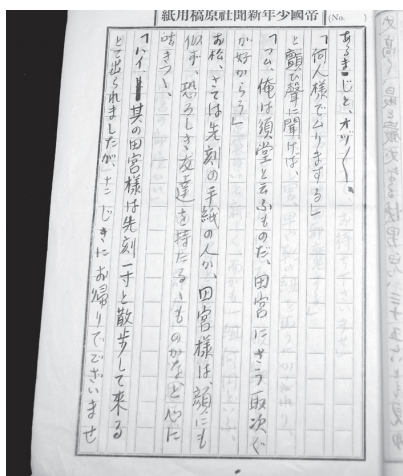
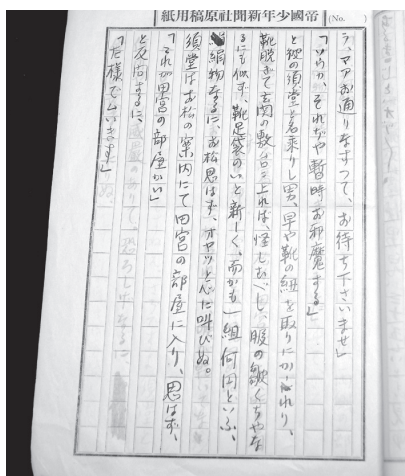
「いや、この人力車なるもの、
一つを見ても、何となく日本
嗅味があつて、懐しい様な、
さて又嘆かはしい様な氣持が
するものだ」

と、何とやら、哀れを含みたる
眼に、見遣れば、車上の紳士俄
かに威厳を増して、此方を睨む
に、思はず苦笑しつ、手に持
ちたるエヂプト巻きをポンと打
ち棄つれば足に彷徨きたる小
犬の耳に當りて、キヤン／＼
と吠えなが(ら)逃げ行く、後姿
のさても日本嗅き事よ、
悠々たる龍造、神保町の電車
通りに出づれば、折から疾風の
如く馳り來れる、一輛の電車、
と見るや既に龍造その車掌台
に在り、飛鳥の如き早業、道行
く人もアレ／＼と驚きの目を睜
りぬ。

○

龍造が電車の飛乘りに、行人
の目を驚かしたるより數時間を
経て、早や六月始めの永き日
も暮れんとする黄昏時、彼の
清風館の玄関に訪れたる男あり
丈く、最と嚴丈なる快男兒、





三十五六とも見ゆるが、髯
ゆるがしつ、
「此方に、田宮といふ人が居る
筈だが」

と怒鳴る如く言ひ放ちて玄関
に突立ちぬ、この男の風体を見
るに、うす黒き背廣に、皺
付きたる太きツポンを穿き、
頭には、他に似合はしからぬ眞
白きバナマ帽を戴きつ、最と

太き自然木の杖、普通の人に
は両手掛けでは■つけぬ様
なるを、軽々と振り廻し■たり、
折りから玄関に居合せたるお松、
一時はギョツとしたるも、眞逆
畫強盗でもあるま■じと、オ
ヅく、

「何人様でゐりまする」
と顫ひ聲に聞けば、

「フム、俺は須堂と云ふものだ、
田宮にさう取次ぐが好からう」
お松、さては先刻の手紙の人か、
田宮様は、顔にも似ず、恐ろ
しき友達を持たる、ものかな、
と心に呟きつ、

「ハイ■其の田宮様は先刻一寸
と散歩して來ると出て出られま
したが、ナニじきにお帰りで
ございませう、マアお通りな
すつて、お待ち下さいませ」
「ソウカ、それぢや暫時お邪魔

する」

と彼の須堂と名乗りし男、早や
靴の紐を取りにか、■れり、
靴脱ぎて玄関の敷台ニ上れば、
怪しむべし、服の皺くちやなる
にも似ず、靴足袋のいと新しく、
而かも一組何円といふ、(絹)絹
物なるに、お松思はず、オヤツ
と心に叫びぬ。

須堂はお松の案内にて田宮の部
屋に入り、思はず、
「これが田宮の部屋かい」
と反問するに、

「左様でゐいます」

「フム、荷物は？」

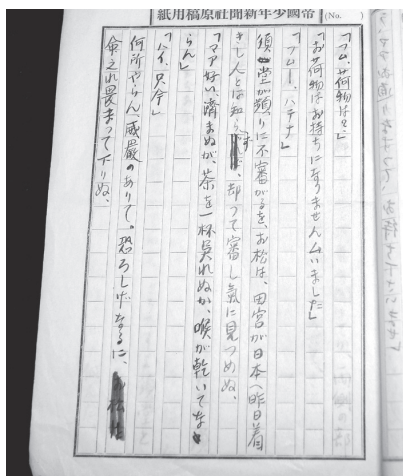
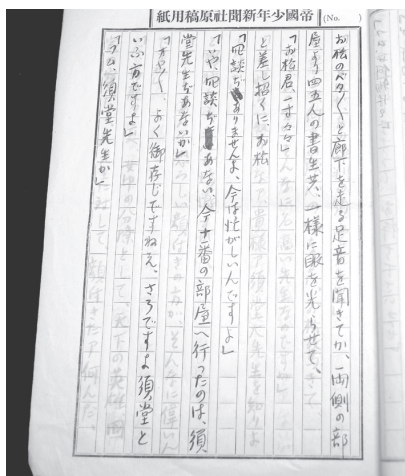
「お荷物はお待ちになりません
ムいました」

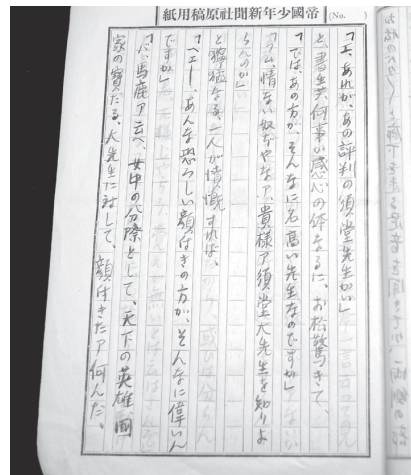
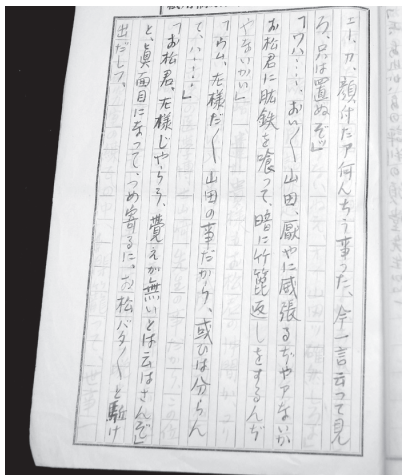
「フム、ハテナ」

須■堂が頻りに不審がるを、お
松は、田宮が日本へ昨日着きし
人とは知ら(ず)■、却つ
て審し氣に見つめぬ、

「マア好い、濟まぬが、茶を一杯
呉れぬか、喉が乾いてな■らん」
「ハイ、只今」

何所やらん、威嚴のありて、恐
ろしげなるに、(お松)命之れ
畏まつて下りぬ、お松のバタ／＼
と廊下を走る足音を聞きてか、
両側の部屋より四五人の書生共、
一様に眼を光らせて、





「お松君、一寸々々」
と差し招くに、お松

「冗談ち■ありませんよ、今は
忙がしいんですよ」

「いや、冗談ち■あない、今
十番の部屋へ行つたのは、須堂
先生ぢあないか」

「オヤ、よく御存じですね
え、さうですよ須堂といふ方
ですよ」

「フム、須堂先生か」

「エ、あれが、あの評判の須堂
先生かい」

と、書生共何事か感心の体な
るに、お松驚きて、

「では、あの方が、そんなに名
い先生なのですか」

「フム、情ない奴ぢやなア、貴
様ア須堂大先生を知りよらん
のか」

と獐獐なる、一人が憤慨すれば、

「ヘエー、あんな恐ろしい顔付き
の方が、そんなに偉いんですか」

「バ、馬鹿ア云へ、女中の分際と
して、天下の英雄、國家の寶た
る、大先生に対して、顔付き

たア何んだ、エー、カ、顔付
たア何んちう事つた、今一言
云つて見ろ、只は置ぬぞッ」

「ワハ……、おい、山田、厭
やに威張るぢやアないかお松

君に脇鉄を喰つて、暗に竹篋
返しをするんぢやないかい」

「ウム、左様だ、山田の事だ
から、或ひは分らんで、ハ……」

「お松君、左様じやらう、覚え
が無いとは云はさんぞ」

と、眞面目になつて、つめ寄る
に、お松バタ／＼と駈け出だ
しつ、

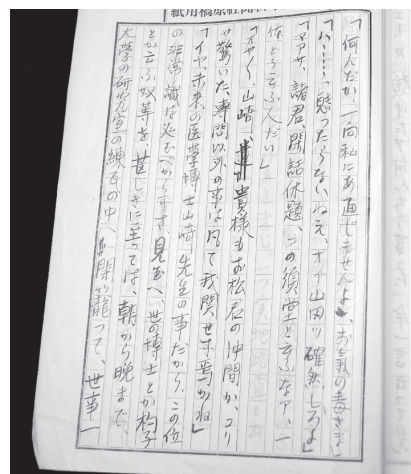
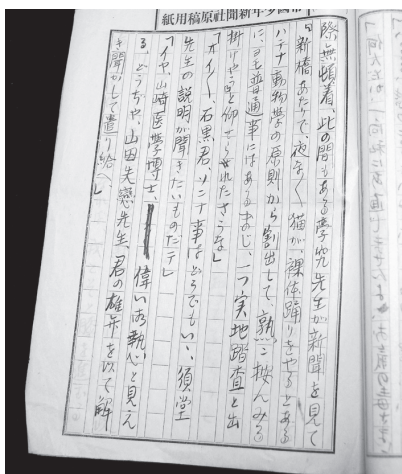
「何んだか、一向私にあ通じま
せんよ■、お氣の毒さま」

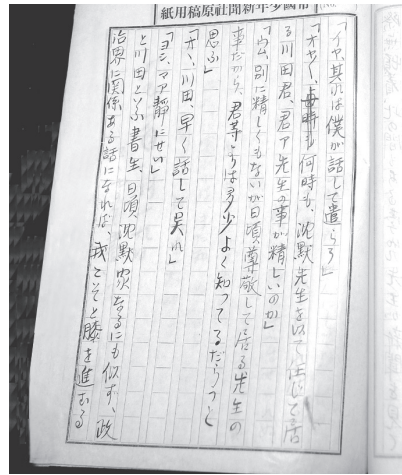
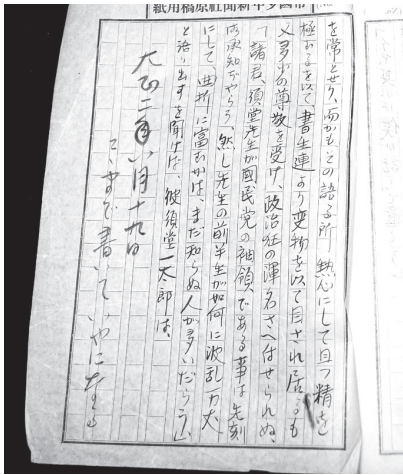
「ハ……、態つたらないねえ、
オイ山田ツ確然しろよ」

「マアサ、諸君、閑話休題、アの
須堂と云ふなア、一体どう云ふ
人だい」

「オヤ、山、■貴様も
お松君の仲間か、コリヤ驚いた、
専門以外の事は凡て我聞せず
焉かね」

「イヤ、未來の醫學博士山
先生の事だから、この位の非常
識は咎むべからずさ、見玉へ、
世の博士とか杓子とか云ふ奴等
を、甚しきに至つては、朝から
晩まで、大學の研究室の練瓦
の中へ■閉籠つて、世事一際
無頓着、此の間もある學究先生
が新聞を見て『新橋あたりで、
夜な／＼猫が、裸体踊りをやる
とあるハテナ動物學の原則か





ら割出して、熟々按みみるに、ヨモ普通事にはあるまじ、一つ実地踏査と出掛けやう」と仰せられたさうな」

「オイ、石黒君、ソナナ事はどうでもいい、須堂先生の説明が聞きたいものだデ」

「イヤ、山崎医学博士、■■■■偉い御執心と見える、どうぢや、山田失戀先生、君の雄弁を以て解き聞かして遣り給へ、」

「イヤ、其れは僕が話して遣らう」

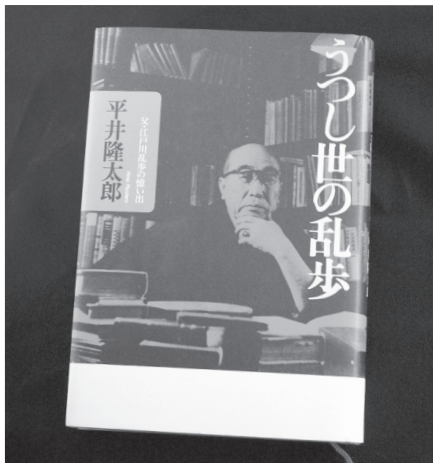
「オヤ、■■■■何時も、沈黙先生を以て任じて居る川田君、君ア先生の事が精しいのか」

「ウム、別に精しくもないが日頃尊敬して居る先生の事だから、君等よりは多少よく知つてるだらうと思ふ」

「オ、川田、早く話して呉れ」

「ヨシ、マア にせい」

と川田といふ書生、日頃沈黙家なるにも似ず、政治界に係ある話になれば、我こそと膝を進むるを常とせり、而かもその語る所熱心にして且つ精を極むるを以て、書生連より変物を以て目され居るも又多少の尊敬を受け、政治狂の渾名さへ付せられぬ、



本の紹介

『うつし世の乱歩』『乱歩の軌跡』

「諸君、須堂先生が國民黨の袖領である事は先刻御承知ぢやらう、然し先生の前半生が如何に波乱万丈にして、曲折に富むかは、まだ知らぬ人が多いだらう、」

と語り出すを聞けば、彼須堂一太郎は、

大正二年八月十九日

こ、まで書いていやになる

平井隆太郎氏の二著が刊行された。隆太郎氏はいうまでもなく、江戸川乱歩の長男であり、社会学者として立教大学の教授をつとめられた人物でもある。乱歩と長年にわたって生活をともしてきた経験と、社会学および心理学の分析的な視点、両著ともこの二つの面がかわさってできた産物だといって良い。『うつし世の乱歩』には前者の家族としての側面が強い文章が多く収められ、『乱歩の軌跡』では少し距離を置いて乱歩の

歩みを記述する試みがなされている。

『うつし世の乱歩』は、昭和四十年に乱歩が亡くなった直後の文章からはじまり、以下、さまざまな媒体に掲載された回想や座談・インタビューなどが収録されている。著者が生まれたのは大正十年、乱歩が作家となる直前の時期で、以後戦中などの一時期をのぞいて、晩年まで同居することになる。しかし乱歩の性格と、夜間に仕事をするというスタイルから、接触はあまり多くはなかったという。同じ家で生活をしながら、執筆中はほとんど会うこともなく、普段からある種のどこちなさがあるような親子関係が描かれている。また同時に、息子に玩具を買いつけたり、進路について助言をしたりもする、ごく普通の父親の役割も果たしていたことも見えてくる。このような乱歩の実像を、ときには心理学なども用いた分析的な角度も含めて、いろいろなかたちで理解していこうとするのが、本書に収められた文章である。

『乱歩の軌跡』は、乱歩が残したスクラップブック『貼雑年譜』を解説していくかたちで、乱歩の歩みがたどられる。昭和五十三年・五十四年の講談社版「江戸川乱歩全集」月報に連載されたもので、「貼雑年譜」の第一巻と第二巻をひもときながら、解説を加えていくかたちをとっている。「貼雑年譜」は「貼雑帖」とも言われ、昭和十六年までに二冊がまとめられ、以

後晩年までにさらに七冊、計九冊が作成された。(最初の二冊については、その抜粋が平成元年に講談社から刊行され、完全復刻版は東京創元社から平成三年に刊行されている。)乱歩の「探偵小説四十年」はこの年譜の記録をもとにした部分も多いのだが、隆太郎氏はそれとの重複をな



るべく避けて記述を進めていく。探偵小説史という枠を離れているために、隆太郎氏の記述からは明治から昭和を生きたひとりの人間としての乱歩像がうかがいあ

がってくる。
またこれらの文章と、本多正一氏・浜田雄介氏のそれぞれの解説もあわせて、

著者である平井隆太郎という人物の姿が見えてくるところも大きいのではないかと思います。

(落合教幸)

『うつし世の乱歩 父江戸川乱歩の思い出』

河出書房新社 二〇〇六年六月

『乱歩の軌跡 父の貼雑帖から』

東京創元社 二〇〇八年七月

編集後記

▼センター通信第三号をお届けします。

▼今年も「江戸川乱歩フォーラム」として講演等が行われます。昨年は、当センター長の藤井淑禎教授による講演、歌舞伎俳優の市川染五郎氏と歌舞伎研究者の鈴木英一氏の対談、そして作家の北村薫氏・有栖川有栖氏の対談でした。今年度は十月十日(土)に開催されますので、詳細は夏に読売新聞で発表されます。

▼昨年十一月には、江戸川乱歩の「人間豹」を原作とする歌舞伎「江戸宵闇妖鉤爪」が国立劇場で公演されました。今年も第二弾が秋に続演されます。

▼角川書店から『作家と遊ぼう ミステリー・カレッジメモリアルブック』が刊行されました。一昨年、立教大学を会場としておこなわれた、日本推理作家協会六十周年記念イベントの記録です。

▼「大衆文化」創刊準備号・創刊号が刊行されました。乱歩や探偵小説に限らず、さまざまな大衆文化研究の発表媒体としていきたいと考えています。投稿原稿も随時受け付けております。第二号は秋頃刊行される予定です。

▼十月には、立教大学と神奈川近代文学館の共催で同館にて「大乱歩展」が開かれます。乱歩の原稿・蔵書・遺品などが多数展示されます。

▼旧江戸川乱歩邸は毎週金曜に公開しています。(研究目的で蔵書の閲覧も可能ですが、その場合は予約をお願いいたします。)

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
センター通信 第三号

二〇〇九年三月三十一日 発行

編集・発行 立教大学江戸川乱歩記念

大衆文化研究センター

〒七二八〇一

東京都豊島区西池袋三三三四一

電話番号 〇三―三九八五―四六四一

(FAX兼) E-mail: rampo@grp.rikkyo.ne.jp

開室日

月・水・金曜(公開は金曜のみ)

(十時三十分～十二時、

十三時～十六時)

資料閲覧には事前予約が必要です。